

台湾侵攻3

電撃戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

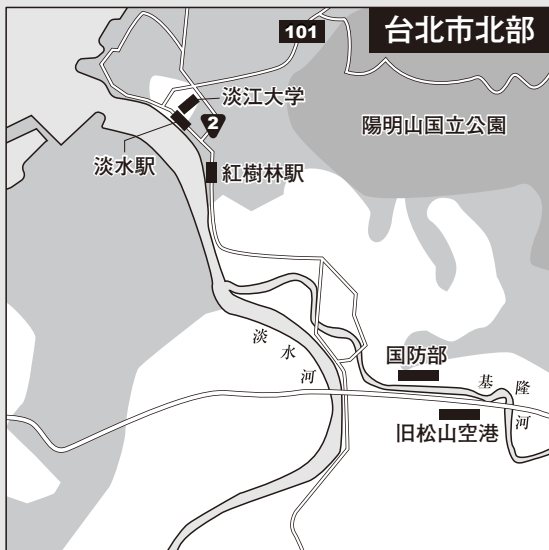
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 消えた旅団	23
第二章 前門の虎、後門の狼	43
第三章 ヴァンガード・フォース	70
第四章 堅忍不拔	97
第五章 後背地	123
第六章 艦隊、西へ	150
第七章 英雄物語	174
第八章 第2梯団	194
エピローグ	204

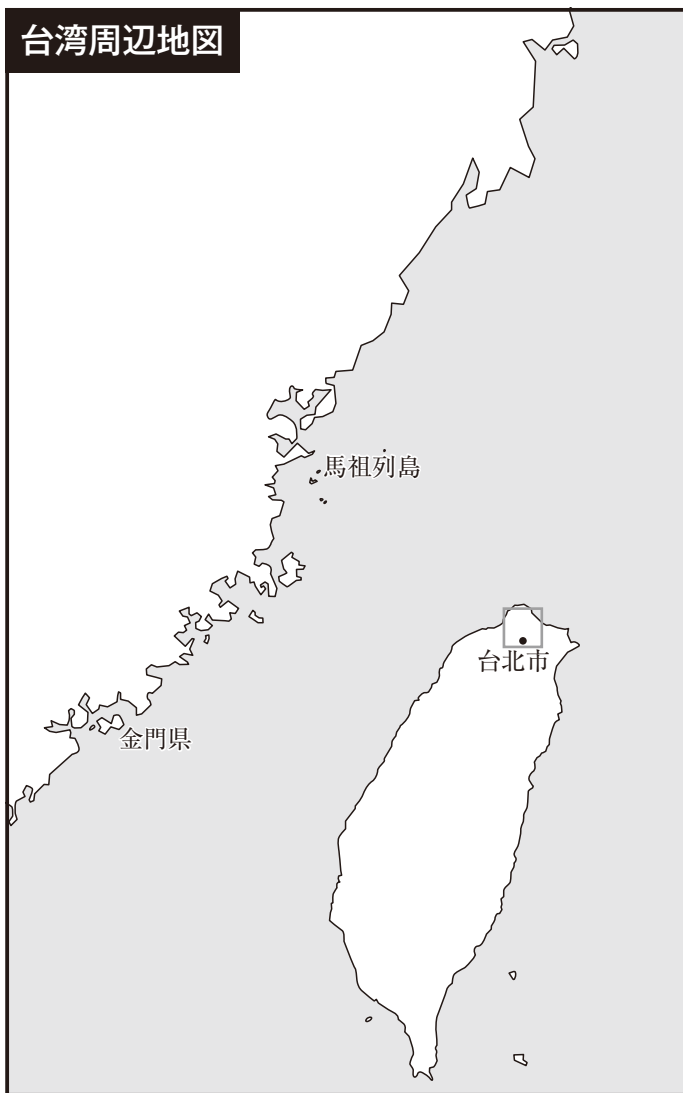
台北市北部



与那国島



台湾周辺地図



金門県

馬祖列島

台北市

登場人物紹介

日本

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：ファーム。

高山健 一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦 一曹。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏 三佐。元韓国人、韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：パレル。

福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

水野智雄 一曹。元オリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

西川新介 二曹。もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニー

ドル。

小田桐将 三曹。タガログ語使い。コードネーム：ベビーフェイス。

阿比留憲 三曹。対馬出身。コードネーム：ダック。

赤羽拓真 三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：

シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。

〈水陸機動団〉

し ば ひかる

司馬光 一佐。水陸機動団教官。

はく ぼ ごと

白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

●航空自衛隊

〈総隊司令部〉

まる やま たく み

丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

は ぶ み ね み つ

羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

き た が わ

喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。情報将校。横田出身で、父親はイラク

で戦死したアメリカの空軍将校。

しん じょう あい

新庄藍 一尉。父親は防府の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

〈警戒航空団〉

・第三〇七臨時飛行隊

ひ だか まさ あ き

日高正章 二佐。飛行隊長。

ひ だか まさ あ き

〈前線航空管制チーム〉

いの ぐち て つ べい

猪口徹平 元一尉。民間軍事会社と雇用契約を結び復帰。

わか せ なお き

若瀬直樹 一曹。チーム最年少の四〇歳。

●防衛省

〈陸幕防衛部〉

う し ま や す お

牛嶋保夫 陸上幕僚長。陸将。

●外務省

か た くら ぞう いちろう

片倉宗一郎 外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。

〈日本台湾交流協会〉

い ず み し ろ う

和泉史朗 台北事務所所長。事務所のナンバー3で、大使相当。外務省チ

ャイナ・スクールの一人。

●内閣

あ ぞ う し ろ う

阿相士郎 総理大臣。

●警察庁

ひ い ら き な お と

柗木尚人 警視長。関東管区警察局・サイバー局参与。

●警視庁

は い た に あ き お

灰谷昭雄 元警部。警視庁公安部退職後任用。

●国際連合

さいおん じてらみ
西園寺照實 U N H C R 国連難民高等弁務官事務所の上級顧問。

●桜会

あかみねてつぞう
赤峰鉄蔵 グループ社長兼代表取締役社長。

はまたささお
浜田左千夫 元陸自三佐。関東エリアBCP（事業継続計画）本部長。

●日越人材ブリッジ

ディン・レイ・スエン 代表取締役。京族。

●その他

いとうひろし
井藤浩 元陸自一佐。工学博士。陸上自衛隊初のサイバー戦部隊を立ち上げた後、民間に転じた。政府のセキュリティ・クリアランスを持つ。

こまちみなみ
小町南 女子大生。コンビニのアルバイト。

やまこうじ
安功児 小町と同じコンビニのアルバイト。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

●空軍

オリバー・R・エバンズ 中佐。第18戦闘航空団の作戦参謀兼EXのインストラクター。

エルシー・チャン 少佐。中国系。

//// 中国 //////////////////////////////////////

●陸軍

コンシュエリ
孔雪麗 中尉。情報部所属。中国の少数民族の一つである京族。

イエンチン
顔誠 軍曹（中士）。孔雪麗の部隊ナンバー2。

●海軍

ジャオロン
〈蛟竜突撃隊〉

ソンチン
宋勤 中佐。元北京大学日本研究センター研究員。

〈東海艦隊〉075型強襲揚陸艦二番艦 華山、(40000トン)

・Y-9X哨戒機

チョンクイロン
鍾桂蘭 海軍少佐。AESAレーダーの専門家。

〈第164海軍陸戦兵旅団〉

ヤオイェン
姚彦 少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

タイーチイ
戴一智 中佐。旅団情報参謀。

チェンシュアイ
程帥 中尉。技術将校兼雷炎大佐副官。

台湾

●陸軍

ドラゴン・ダンス
《第153歩兵旅団》別名《翔龍部隊》

ウ ツォンミン
于聰明 中佐。一個大隊を率いる。

ロンチェン
《第601航空旅団》別名《龍城部隊》

フォンチェンダアン
馮陳旦 中佐。作戦参謀。

ピンロン イ
平龍義 少佐。第1中隊長。

ランゲーリン
藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。コールサイン：マリリン。

ティエンズーユイ
田子瑜 少尉。新米仕官。

リーダウワンション
李冠生 大佐。元烈嶼守備大隊指揮官。

パンインミン
潘英明 中尉。流ちょうな日本語を話す。

●海兵隊

ヴァンガード・フォース
《第66旅団》別名《先鋒部隊》

イエシキホ
葉少博 大佐。戦車大隊を指揮する。

ガングーウェイ
顔國輝 中佐。作戦参謀。

アイアン・フォース
《第99旅団》別名《鐵軍部隊》

チェンウーイ
陳智偉 大佐。一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン
黃俊男 中佐。作戦参謀、大隊副隊長。フロッグマン部隊出身。

ウージンフー
吳金福 少佐。情報参謀。

チェンエンロン
陳正龍 少佐。台湾に上陸した米海兵隊に同行。

ワンイージェ
王一傑 少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

リウジンロン
劉金龍 曹長（上士）。コードネーム：ドラゴン。

ヤンヂェミン
楊志明 上等兵。コードネーム：アーティスト。

《パラシュート連隊第3歩兵大隊》

ガオカンファ
高冠華 中佐。大隊を率いる。

《戦車小隊》

チウジェンアン
邱建安 中尉。戦車小隊長。定年前のベテラン。

●空軍

リーイエン
李彦 空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジエンホン
劉建宏 空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。編隊長機。

●国防省

グージンクワン
谷進強 国防大臣。前国家安全局長。異名は `アイスマン、`ゴ・ロック岩の男、。

●その他

ワンチーハオ
王志豪 退役海軍中將。海兵隊元司令官。

ワンウエンション
王文雄 台日親善協会と国民党の対外宣伝部次長。王志豪とは遠縁。京都大学法学部、大学院を出ている。

ライシャオチャオ
賴筱喬 ライロンユン 戦死した賴龍雲陸軍中將の一人娘。台北の飲茶屋の店主。

台灣侵攻3

電擊戰

プロローグ

女子大生・小町南^{こまちみなみ}は、その夕方近く、コンビニ・バイトの深夜勤明けでまだ寝ていたが、不意の来客で起こされた。一瞬、パニックになった。すでに停電して三日目になろうということも忘れ、ミカン箱の上に自作した鏡台のLEDライトが点かないことに苛ついた。

来客には、確か何分後かにまた来てくれと言ったような気がする。それが一〇分後だったか、それとも三〇分後だったか……。

消防車のサイレンの音と、役所の広報のスピーカーが聞こえてくるが、何を喋っているのかは全くわからない。それに、あちこちからけたたまし

いクラクションの音が被さる。

どこかで戦争でも始まったのか……、と一瞬思った。そうだ……、日本はまさに戦争のまっただ中にいて、ごく近所にも中国のミサイルが落下して多くの犠牲者を出したばかりだ。弾道弾とかいう奴らしい。宇宙を飛んで、中国から発射されてほんの一〇分で日本に墜ちてくる。自衛隊はその撃墜に失敗しているという噂だった。

停電しているせいで、テレビは映らず、ラジオも聴けない。ネットもダウンしていて、メール一本送受信できなかつた。そんな状況がもう二日、三日も続いている。

まだ二日しか経っていない、いや三日……。そのことが俄に信じられなかった。もう一週間かそこいら経過したような気がする。

だが、プロパンガスのボロアパートに暮らす彼女の所に、タワマン暮らしの見知らぬ母子が、ミルク用のお湯を求めて訪ねてきたのは、まだ二日前だ。それからバイト先のコンビニに、どうせ閉まっているだろうが挨拶だけして帰ろうと顔を出したら、コンビニがライフラインの拠点と化しており、彼女はそこでバイト仲間を仕切って切り盛りした。

昨日の夜明け時、ミサイルがご近所に墜ち、その爆風は店も襲った。ご近所さんで救援隊を組織して、酷い爆煙の中、被災現場に向かった。そこでパニックを起こしましたが、この二日間、コンビニのベテラン・バイトとしてそれなりに仕事できた満足感があった。

ネットも電気もないが、社会は落ち着きを取り戻しつつもあった。空だったコンビニの棚にも、僅かとは言え、商品が戻りつつある。生産活動が復旧したわけではなく、停電ほか諸々で止まっていた配送網が復旧しつつあるということらしくあった。一時的に倉庫に溜まっていた商品が配送されているだけだ。

この二日間、日中は、ただアパートに帰って死んだように寝るだけだ。水道の水圧は下がりつつあるが、幸い水は出るし、何しろプロパンだから熱いシャワーも浴びられる。今はここが天国だった。

そして都民には、この苦境を励ますためらしいイベントがあった。毎晩午後八時に、東京タワーがライトアップされるのだ。

真っ暗闇の東京を、その時間だけ東京タワーがひととき明るく点灯する。本当の目的は何なの

か？ 何の為に、どこから電力をかき集めているのか知らないが、それは間違いない。都民に希望を与えていた。昨夜、ママチャリを漕いで一人で見に行った時は、3・11大震災で亡くした家族を思い出し、号泣したほどだった。横浜ではマリントワー、大坂では通天閣。そうやってランドマークを持つ都市では、同様のライトアップ・イベントが同時刻に行われているという話だった。

とまれ彼女は、不意の来客で本来起きる予定だった時間より二時間ほど早く起きた。外はまだ明るかった。

入念な化粧は出来ない。くしゃくしゃの髪をとかし、ルージユを塗る程度のことしか時間は無かった。ジーンズに上っ張り、バイトに持ち歩く小さなザックを持って玄関を開けた。

電信柱の陰で、その中国人男性は待っていた。こちらにも、そこそこラフな格好だった。ちよつと

見、中国人には見えない。

どこか六本木辺りのしゃれた喫茶店で、お仲間と仮想通貨の話でもしていそうな雰囲気だ。常に笑顔を絶やさず、自信に満ちた顔をしている。

モニター越しでもイケメンだと思ったが、本物の方がずっとイケメンだった。実年齢より遥かに若く見えるタイプだ。

知り合ってから、かれこれ一年になる。語学交流サイトのマッチング・アプリで出会った。向こうは日本語を、こちらは北京語を学べる。料金はネット代だけ、つまり無料。お互いウインウインの関係だ。

週三日、彼女はいつも、コンビニの深夜バイトに出る寸前まで、その相手と話し込んでいた。この戦争というか、混乱が始まって、いつの間にか連絡が取れなくなっただけで心配していたのだった。それが突然、自分のアパートを訪ねてきた。住所を

教えた記憶も無かったが、それより、どうやって日本にきたのかも疑問だった。

中国では疫病が発生し、国外へと飛ぶ航空便、船便も全て止まっているはずだった。

北京大学日本研究センターの연구원・宋勤^{ソンチン}は、小町が階段を駆け下りて現れると、覗いていたスマホをポケットに仕舞い、「すみません、突然、近所まで来ました」と彼女が教えた日本語でぺこりと頭を下げた。

「この場面では、『近所まで来たものだから』、あるいは、『近所に用事あって』です。そんなことはどうしても良いけれど……。少し、歩きましょう……」

と小町は小声で囁き急かすように歩いた。バイト先へと向かう途中に、いつも通る公園がある。住宅に三方を囲まれ、中央にイチヨウの大木が聳^{そび}えているせいで、昼でも少し暗い。午前中はいつ

も保育園児が遊んでいるが、午後はほとんど人気が無かった。

遊具も、錆び付いた滑り台とブランコしかない。後ろに戸建ての壁があるベンチに腰を下ろした。「申し訳ないですが、日本語で良いですか？ 今、誰かに北京語を聞かれるのは避けたいから」

「はい。もちろんです。大使館からも、外で北京語を使うなど注意が届いています」

「どうして日本に！」

と小町は最大の疑問をぶつけた。

「はい。話せば長い。紆余曲折^{うよきよくせつ}？」

「この場面で、『紆余曲折』は適切かしら……」

「東京で、研究会がありました。研究会というか、パネル・ディスカッションです。研究センターの上司が中国側出席者の一人として参加予定でした。ところが、家族が死んで……」

「ここでは、『御家族に不幸があつて……』が良

いわね」

「はい、それで、日本には来れなく——」

「それはら抜き表現です。来られなく、が本則です」

「来られなくなつて、これは日中両国政府が後援の会議だったので、すぐ私が指名されて、ビザも即日発行。東沙島^{とうさとう}で、いろいろあつて、確かあれは、上海で豪華客船がシージャックされた当日だつたと思います」

「それ、十日も前よ!——」

「ああ、もうそんなに経ちますか。自分は、どうにか東京には来られたのですが、もちろんそのまゝ、大使館が手配してくれたホテルに隔離されました。感染の可能性はほとんどゼロでしたが。一週間、部屋から一步も出られませんでしたが。でも楽しかったです。三食、日本の美味しいお弁当を堪能しました! 幕の内弁当ですか。やはりあれ

が王道ですね。でもその間に、尖閣諸島を巡る問題が起こつて」

「戦争ね。政府は、中国軍を追い出してからの事実を認めました。尖閣諸島で中国軍と戦争があつたと」

「はい。不幸なことです」

小町は、そこでふと、宋があちこち怪我していることに気付いた。手の甲と、顎に絆創膏を貼っている。頬にも擦過傷のようなものがあつた。

「宋さん、何だか傷だらけだわ?」

「ああ、この絆創膏ですね。それが、ホテル暮らしにうんざりして、こっちで働いている友人のマンションに引っ越したのです。もちろん大使館の許可は得ています。で、例の……、大停電。ここで、『れいの』という表現は正しいですか?」

「はい、正しいです」

「それで、真つ暗闇の部屋で転んで、いろんな所

打ちました」

事実としては、その怪我は、彼が特殊部隊を率いて上陸した魚釣島でのものだった。銃撃による破片やら何やらでの怪我だった。だが彼はついていた。彼が率いた一個小隊はほとんど全滅しかけた。その後、ロシア人外交官に化け、自衛官捕虜帰還便に乗って新潟に降り立ったのだ。

「それは大変でしたね。お見舞い申し上げます。でも、私、住所とか教えませんでしたっけ？」

「はい。ほら先々月、上海の物流会社に出す、エントリースートの作成を手伝いました」

「ああ、あれね」

「あの時のデータが、私のパソコンに残っていました。会社から返事は来ましたか？」

「はい。おかげさまで、内々定は貰えました。一ヶ月、インターンシップとして東京事務所で働いてみるつもりです」

「そうですね。それは良いニュースです。でも焦らないで下さい。小町さんに合う仕事は、他にもあるかも知れないから。もっと良い条件の会社も探して下さい」

住宅街の路地をスーツケースをガラガラ押して歩く家族連れがいた。

「また、避難民が増えてきましたね」

「昨日、この近くにミサイルが落ちました。そのせいかしら……」

「知らないのですか？ またミサイルが落ちたことを」

「え？ 今日も？ どこに？……」

宋は、スマホを出して、ネイバータッチと呼ばれるピアトゥピア型アプリの画面をスクロールさせた。キャリアの回線も落ちているから、携帯電話としてもインターネットとしても使えない。だが、ワイファイやBluetoothス機能を使うこと

で、その接続エリア内にいる見知らぬ者同士が回線で繋がり、誰でも情報発信できるツールだった。昨日の午後から爆発的に拡がり、北海道と沖縄を除く日本全土で使われていた。

新宿で書き込まれた情報が、一五分かそこいらで渋谷まで届く。スマホはコンビニで充電し、みんながそのアプリにしがみ付いていた。

「小町さんは、使っていないのですか？」

「ああ、ネイバータッチね。便利そうだけど。私のスマホ、バッテリーがへたっていて——」

「へた？……」

「これは、くたびれる、あるいは古くなるの、碎けた表現ですね。それで、なるべくスマホを起動しないようにしています。どうせニュースは誰かが教えてくれるし。電源自体、切ったままです」

宋は、その画面を見せた。代々木公園と荒川の河川敷に弾道弾が命中し、地元消防団の発表とし

て、代々木公園では百数十名、荒川では、少年野球団の児童二〇名が犠牲になったとのことだった。「あら、大変なことに……」

「中国人を代表して、深くお詫びします。こんなことは間違っている」

宋のその言葉に嘘は無かった。民間人を狙い撃ちにする無差別攻撃は卑劣な戦法だ。効果絶大であるにせよ。

「帝都防衛団というお役所が……」

「それ、役所じゃない。ふざけた名前で、たぶんカルトな誰かの悪戯だろうという噂よ」

「そこが、明日は一〇発が落ちてくる。自衛隊は撃ち落とせないから、都民は今日中に東京から脱出せよ！ と言っています。こういうのを、『煽る』というのですよね？」

「そうです」

と小町は投げやりに応じた。

「小町さんは避難しないのですか？」

「いいえ。人間は、いつでもどこにいても、運が無ければ死ぬのです。だから私は逃げません。宋さんこそ、大使館はどこか避難場所を用意してくれないのですか？」

「当然のことですが、中国人は、どこに逃げても同じです。ここ日本に留まる限り、安全な場所はありません。当然の罰です」

「そんなことはないわ。国が始めた戦争に、個人が責任を感じる必要はありません」

「さすが、世田谷区民ですね。インテリ？ 知的レベルが高い」

「宋さんは、帰国は出来ないのですか？ 食べ物確保するのも大変でしょう？ あそうだ……」

小町は、ザックの中を探り、エナジードリンクを一本出した。

「これどうぞ。バイト先で貰いました」

「あ、貰います。日本のこういうドリンク、大好きです！ お土産に一杯買って帰ろうかと思っています」

宋は、栓を開けてグビグビと飲み干した。

「何しろ、日本で暮らす中国人は多いです。何十万人といますから、全員の脱出は無理です。それに、北京語で喋りながら出歩くようなことをしなければ、安全です。六割くらいは安全です。貴方がたは文明人だ。今日は、豪徳寺に観光に来たのです。何時間もいました。良い所ですね」

「どこに泊まってらっしゃるの？」

「中央線沿いのマンションです。ここまで歩いて七、八キロだったと思います。そんなにたいした距離ではありません」

「宋さん、毎日ジョギングしていると言ってたものね。でも帰りは、暗くなるのではなくて？」

「スマホの地図は、オフラインでも使えるし、コ

ンビニで充電したモバイル・バッテリーもありま
す。マグライトも。でも、暗くなっても電気があ
るコンビニ伝いに歩けば簡単ですよ。東京を、満
喫したいです」

「そうねえ……、お店や博物館が開いていれば案
内もするけれど。私の部屋で、晩ご飯でも食べて
帰りますか？」

「有り難うございます。機会があったらぜひ！
小町さんのこと、もっと知りたいです。でも今日
は突然訪ねて来ましたから、このまま帰ります。

そういうの、日本では失礼な行為ですか？」

「そうね。最近は珍しいわね。そういうサブライ
ズは。でも、宋さんなら歓迎します！」

二人は、それから東京タワーのライトアップの
話で弾んだ。小町は、初日の夜、住民の行列に加
わって、東京タワーが見える場所まで近づこうと
したが、辿り着けなかった。だが、ガラス張りの

ビル壁に反射するそれを見た。昨夜は、自転車で、
高台の公園に向かい、人垣越しにそれを見て、少
しだけ泣いたことを教えた。

宋も、その群衆の中に加わり、日本人のたくま
しさに感動したと伝えた。

人民解放軍による東沙島奇襲上陸作戦からす
で二週間が経過していた。解放軍は、東沙島電撃
奪取に続いて尖閣諸島魚釣島へと上陸してきた。

自衛隊は、これを寡兵で迎え撃ち、最後は水機
団七〇名の犠牲を払って撃退した。海上自衛隊は、
イージス護衛艦の弾庫を空にして、解放軍による
各種ミサイルの飽和攻撃を凌いだ。航空自衛隊も、
那覇基地に数度、弾道弾攻撃を喰らいつつ、日本
の空を支えていた。

ただし、政府は事態の收拾に失敗したことの責
任を取る形で総辞職し、新しい政権が誕生し、同

時に防衛出動命令が発令された。

だが、中国は、矢継ぎ早に手を打ってきた。ハイブリッド戦争を仕掛け、海底ケーブルの引き揚げ基地や変電所を爆破し、発電所を始めとして放送施設へのサイバーアタックで、それらをダウンさせていた。もちろんインターネットも使えない。メール一本やりとり出来ないのだ。

日本も台湾も、すでに三日間停電している。東京では都市ガスも止まっていた。放送されている電波はなく、衛星テレビからラジオまで止まっていた。

東京の住民が何かの情報を知る手立ては、コンビニに貼り出される瓦版と、ネイバータツチなる怪しげな掲示板アプリのみだった。その状況は、台湾でもたいして変わらなかった。

日本と台湾は、完全にブラックアウトしていた。

開戦十四日目、解放軍は、満を持して台湾島本島への上陸作戦を敢行した。その作戦はたいした抵抗も受けずに一瞬、成功したかに見えたが、台湾軍はこれを山岳地帯に配置した砲兵部隊で一挙に叩き、上陸したばかりの解放軍兵士、二万名が潰滅した。しかし、三波に分かれていた最後の上陸部隊は、寸前に転進し、台北市と目と鼻の先の山岳部に上陸してきた。これが見事な奇襲作戦になり、一個戦闘旅団がほぼ無傷で上陸できた。迎撃した台湾軍海兵隊は、これを後退しつつ迎え撃ち、時間稼ぎしていたが、今も解放軍の進軍は続いていた。解放軍の電撃作戦は成功しつつあり、敵は、首都台北のすぐそこまで迫っていた。

第一章 消えた旅団

台北の北部に抜がる陽明山ヤンミンシャは、日帝支配時に台湾の箱根として親しまれた。今も台湾市民に愛され、台北に最も近い風光明媚な日帰り観光地として日本人も訪れる。

解放軍は、その裾野の西海岸に上陸してきた。

敵上陸部隊潰滅！ の吉報に有頂天になっていた台湾軍は、しばらくその事実^{チエンチウエイ}に気付かず、陽明山を守っていた海兵隊部隊から自転車で走ってきた伝令にその事実を聞かされてもなかなか信じなかつた。

時間は掛かったが、敵が一方的に前線を突破する事態は防いだ。だが、敵が着実に前進している

ことも事実だった。

ほんの数分前には、地元の民間防衛部隊が拠点としていた台湾最北の鉄道駅が沖合の艦隊から発射された巡航ミサイルで瓦礫と化した。

台湾軍海兵隊《第99旅団》^{アイアンフオース}を率いる陳智偉大佐は、酷い爆煙の中を、銃を構えて前進する歩兵の後に続いた。細い路地が続く昔ながらの商店街だが、所々家屋が倒壊して、道を埋めている。それらの瓦礫を乗り越えての前進だった。もちろんあちこち火も出ている。

銃撃戦は収まっていたが、バチバチといろんな

ものが燃える音が四方八方から響いてくる。銃撃音と勘違いして、一瞬身構えてしまう。

兵を避難させる必要があると思う。延焼が続けば、消火の手段はない。

だが、肝心の敵はどこに消えたのだ？ ついさつきまで、三方から敵の指揮所を包囲してプレスを掛けているつもりだった。ところが、いざ指揮所突つ込んだら無人だった。

一瞬の隙を突かれた。敵は、恐らく、巡航ミサイル攻撃のタイミングに合わせて脱出したのだろう。もう五分、こちらの動きが速ければ、敵の指揮所を制圧できていた。

だが、それが戦争であり戦場だ。運不運は、敵味方双方に付きまとうのだ。

負傷者を抱えた兵士や住民が、その爆煙の中から出てくる。皆、よろよろして、今にも倒れそうだった。度重なる爆撃で、三半規管が麻痺しかけ

ているのだ。まっすぐ歩くことも辛そうだった。

白髪の老人が、その爆煙の中から出てくる。後ろに、無線機を背負った兵士が従っていたが、不思議なことに、その老人は背広姿だった。ヘルメットも無く、マスク代わりに口にタオルを巻いていた。

「指揮官は誰だ！」

とその老人が聞いてきた。背広は埃を浴びて真っ白だ。

「自分だ！ そちらは誰か？」

と陳はすれ違いざまに立ち止まった。老人がタオルを下げた。その瞬間、陳大佐は目を白黒させて驚いた。陳は、姿勢を正して敬礼した。

「貴方は、^{リエン}烈嶼守備大隊を率いていた李^{リーグワシヨン}冠生大佐ではありませんか？ 自分は一〇年ほど前、陸軍で行われた離島攻略戦の研究会に参加したことがあります。そこで大佐殿の講演を半日、拝聴し、

夜は大いに飲みました！」

「ああ、あれは毎年のイベントだからな」

「陸軍の大佐が淡水駅に陣取って地元の守備隊や陸軍部隊を指揮していると耳に入っていました。

大佐殿だったのですか……。道理でここまで持ったわけだ」

「陸軍はちよつと格好が悪い戦いになっているが、そういうことだ。駅舎とその周辺は潰滅した。自分も含めて、戦闘員は、寸前に、敵を包囲しようとして出ていたので、それなりの数が助かったはずだが、駅に収容していた負傷者はたぶん瓦礫の下だ。あちらに行ってももう何も出来ないぞ」

「そういう状況ですか。敵はどこに消えたのですか？」

「君らが交戦していないということなら、向かった先は一つだぞ」

李大佐は、東の方角を指さした。台北市側だ。

「自殺行為です。紅樹林ホンシューリンから東の隘路にはまることになる」

「突破する自信があるということだろうな。ドローンとか無いのか？」

「そんな贅沢品は、前線には回ってきませんよ」

「敵のドローンは頻繁に目撃するがな。淡水のグランドに作って敵が接収した野戦病院は無事かね。負傷者は、あそこに運び込むしかないが」

「無事です。たぶん、解放軍の衛生兵もまだ留まっています。負傷者の後送にこちらから兵は出せませんが……」

「構わない。君らはすぐ、敵を追いたまえ。ところで、辛うじて生き残った陸軍の通信兵が、敵のメッシュ・ネットワークがどうのこうのと言っているのだが」

「はい。こちらも把握しています。無線LAN中継器を装備したドローンを飛ばし、それで、いわ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。